

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 口	第 1 号	氏 名	土井 登紀子	
	甲口保				
審査委員	乙 口	副 査	岩 本 勉		
	乙口保				吉 村 弘
	口 修				松 香 芳 三

題 目

Relationship between Chewing Behavior and Oral Conditions in Elementary School Children Based on the “Chewing 30” Program: An Intervention Study

(嚙ミング 30 学習による小学生の咀嚼の習慣と口腔内状態に関する介入研究)

要 旨

本研究では、児童を対象として、食習慣と口腔状態との関連性を調査することに加え、「嚙ミング 30 学習」による食育介入の効果を明らかにすることを目的とした。

徳島県内にある 2 つの小学校のうち、1 校の 5 年生 81 名を介入群とし、他校の 5 年生 39 名をコントロール群とした。調査項目として、歯肉の状態に加え、食習慣に関する保健調査を実施した。また、介入群を対象に、口腔内写真を用いて児童の PMA index を評価した。

「嚙ミング 30 学習」による介入では、給食の前に「よく嚙んで食べる」と等の健康教育を行った後、咀嚼回数および食事時間を計測できる咀嚼計“かみかみセンサー”を装着して給食を摂取させた。上記の学習を年間 5 回実施し、更に口腔の健康に関する 45 分間の特別講義を年間 2 回行った。

本研究の結果、コントロール群と比較して、介入群において「よく嚙んで食べる」項目が有意に改善していた ( $p < 0.01$ )。更に、介入群のうち、介入後に「よく嚙んで食べる」項目が改善した「改善群」と、改善しなかった「非改善群」を比較した。歯肉の状態および PMA index の値について、改善群においては介入前後での変化は認められなかったのに対して、非改善群では介入前と比較して有意に悪化していた ( $p < 0.05$ )。

本研究より、同学習はよく嚙んで食べる習慣を獲得するために有用であると考えられた。さらに、好ましくない咀嚼習慣と歯肉の炎症に関連性が認められたことから、よく嚙んで食べることは、歯肉の炎症の予防にも効果的である可能性が示唆された。

以上より、本研究は歯科医学の発展に寄与するものと期待できる。よって、本論文は博士(口腔保健学)の学位授与に値すると判定した。